

《正岡子規 (36) の続き》その304

天涯茫茫

下村為山の続き

子規在世時にこそ、不折・為山と併称し、両者を対比して論じてもおかしきはなかったが、不折の洋行、帰朝後の画壇での活躍、書道界での貢献などで、今日の知名度は隔段の相違がある。不折は最後には芸術院会員にまでなっている。著書も各種を著し、それぞれが専門書である。

それに反し、為山は一地に居をかまえることなく各地に流寓（子規が死去した明治35年には、大阪に仮寓して、子規に同地の精密な写生画を添えたはがきをしばしば寄せたことは、講談社版の子規全集の別巻一に載るところである。）

次第に洋画から日本画に転じ、本人は俳画と云われるのを嫌い、俳味画と称した小品を多く描いた。また書にも熱心で、中林悟竹の書に傾倒した。

40代後半、軽い脳溢血にかかり、右手に後遺症を残す不幸に陥り、あまつさえ80歳にして、東京大空襲により自宅を焼失し、それ以前から疎開していたが、以後、長野、富山など各地を転々とし昭和24年84歳で、富山県西礪波郡石黒村で歿した。

生涯、一冊の画集も画論集もなく、俳句集も存在しない。不折とは全く正反対の一生であった。

実は本稿を書くために、文学大事典を見てもみたが、不折に比し為山の記事は極端に少ない。何か為山に関する本はないかとさがして、やっと札幌市立中央図書館で次の書物をさがし出した。

『探究・下村為山』 渥美国泰著

1993年9月30日 近代文芸社発行
恐らく為山に関する唯一の伝記ではなからうか。小生の本稿も、殆んどを本書によっている。

著者渥美氏は、テレビの仕事で知られた人らしく、為山に興味を抱いたのは劇作家の飯沢匡氏の推挙によるものだという。

各方面に手をのばして資料を蒐集されたらしく、実に多数の為山作品が載せられている。ただし、少々雑然という感もない訳ではない。随分、たくさん作品が載せられ、俳句なども両句を集めている。

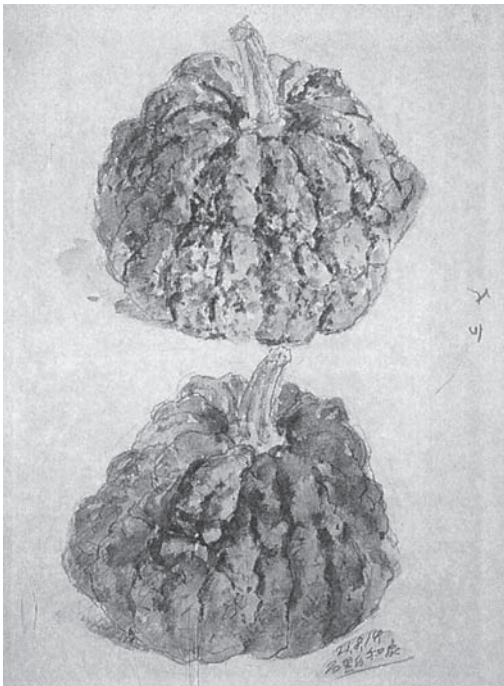
郷里の愛媛県立美術館には為山の作品が、何点も所蔵されているし、地元古美術商小池博英堂にも蒐集品があった。何しろ下村為山展が、県立美術館、郷土美術館、郷土芸術館で三回も開催され、そのパンフレット

も見る事ができたので現地松山を訪れての探索には実に多くの作品を見ることができ、その多くの一々の写真に撮ったのを本書に載せている。

現物を見たので作品の落款や署名も、本書に見ることが出来る。それらの経緯についても本書に詳しい。

為山のスケッチブックは、明治40年頃愛媛県東予地方滞在時から、終焉の地、富山に至るまで書き残されている。詳細に描かれた膨大な量のスケッチには為山の執念が感じられるという。戦火に遭う前に疎開先に持ち出されていたものであろう。

ここには渥美氏の著書から、晩年の作を載せた。80歳を越えてからの作であるが、観察はきまこまかい。同じ南瓜を両面から描いたものである。



南瓜 昭和21年8月14日のスケッチ